

## 宮大工として生きる

宮大工とは、国宝や重要文化財になっている古い建物の修復、寺社の建築を手がける専門的な技術をもった大工のことです。伝統的な建築物の屋根や柱、梁などには高度な技術が必要とされ、文化財保存のために必要な技術として、国から「選定保存技術」に指定されています。

京都で社寺、茶室等の設計・施工を行う株式会社山中工務店にお勤めの宮大工、二宮照和さん（62）にお話をうかがいました。



宮大工 二宮 照和 さん

### ■宮大工になったきっかけ

小さい頃からものをつくるのが好きやったんですが、中学生のとき家にきた薬屋さんが私のつくった木の作品を見て、「ようできとるなあ。大工になったらえんちゃうか」って、大工のところに作品持って行って紹介してくれたんです。父親からも、大工になれば白い飯が食えるとか二桁のかけ算ができればなんとかなるとか言われたこともあって、大工になろうかと思いました。昔の大工は今より地位が高かったんですね。こうした出会いがなければ、親父のあとを継いで生まれ育った愛媛で漁師になっていたでしょうね。中学卒業後は工務店に就職して、宮大工としての修業を始めました。自分の腕を磨くため、また、日本各地の神社仏閣を見てみたいと思い、京都へ出てきたんです。当時は北海道まで行くつもりだったので、まだ旅の途中ですね。

### ■宮大工の仕事

今はお寺さんの庫裡（寺の事務所）の改修をやっています。庫裡は本堂とつながっている場合が多く、外観は本堂の雰囲気を壊さないような造りになっています。庫裡を新築する場合がありますが、本堂と同じように修繕をしていけば、何百年も使えます。木が腐った箇所を取り替えたり、歪んだ躯体（骨組み）を正したり、また、現代人の生活スタイルに合わせてリフォームしたりする場合があります。自分と弟子の二人で半年ちょっとかかると思いますね。これまでは、学校、ログハウス、仮桧（コンクリートを流し込む桧）、茶室、公民館、お宮、お寺、建て売り住宅、蔵、納骨堂…いろいろなものを手がけてきました。宮



庫裡の修繕を行う二宮さん

大工のなかにはお寺や神社しか建てんという人もおるけど、いつも仕事があるわけではない。僕は、仕事が舞い込んできたからには断らずにやってきました。今まで一回も途中でやめたことはないからね。逃げグセがついたらあかんと思ってね。やり始めたらどんな仕事でも責任もってやり遂げてきました。それが僕の誇りですよ。仕事が完成したときの達成感は何物にもかえがたいですね。

### ■宮大工の技術

宮大工の技術のなかでもっとも大切なのは、楔（くさび）の榫子の技やと思います。楔とは、釘などを使わずに木と木を組み合わせてつなぎ合わせる技術です。木と木を離すことも、引っ張ることもできる。しめることもできるんです。たとえば、お寺の屋根はすごい重量があります。それを支えるのも楔の技術です。楔の細さや材質、角度によって重心のかかり方が変わってきて、耐久性に大きく影響します。また、枯木という一本の木も重要です。屋根の重さを何十年と支えるために、榫子の原理を使ってこの枯木をどういうバランスで置くかが大事になってきます。それは絶妙なバランスを経験によって身につけていくわけです。こうした技術の習得には、考え方（心）が重要やと思います。このくらいでいいかと妥協すればそこまで終わってしまう。絶対にこの仕事をやりきるといって持続力、粘り、意志の強さが大事です。

新しいことをするのは怖いから勇気がいりますね。床の間をつくるときは、1本何十万～何百万ほどする材木もあるから絶対失敗できない。丁稚当時、親方が言っていたんですが、大工は一発勝負で後戻りはしない、だからこそ失敗しないように現場での作業よりもどうしよう、こうしようと頭を使って考えていることが多いと。そのくらい、やり直しのきかない世界です。腕のいい人は楔を

打つにしろ、たまかけ（木を持ち上げる）にしろ、一発で成功させます。常に緊張感をもってるからですわ。宮大工の世界では、「釘抜きを使うような仕事をするな」といわれます。後戻りをするような仕事は最初からするなという意味ですね。とはいっても、修業中の段階で、失敗しないというのは無理です。親方から怒られて学ぶこともあるし、何より、教えられる前に自分で技を盗み取っていくことが大事です。宮大工の仕事に教科書はありません。口から口へ、手から手へ伝えられていくものなんです。

### ■宮大工の生きざま

気持ちのもちようによっては、道を歩いていても勉強になります。建物を見ながらその技を盗んでいくんですよ。僕はメモをとったり写真に収めたりすることはほとんどありません。写真があったら安心してしまって、意地でも覚えようという気にならないでしょ。集中して見て、覚えて、自分の引き出しをいっぱいつくります。また、僕は遊び心を大事にしています。吹き抜けてありますね。あれをもったいないから必要ないとするか、必要とするかは大きな違いです。もし心と財産の余裕があったら僕は必要だと思ふね。風が通って気持ちいいでしょ。檜皮葺<sup>ひわだぶき</sup>の屋根も、腐るのになんで瓦じゃなくてわざわざ木でつくるのか聞かれたことがあります。あれはね、美しさを尊ぶ、ただそれだけです。無駄をしろとはいわないけど、完璧を追求するばかりではあかんのです。床の間や仏間も今は設けない家が増えていますが、日本文化の一つとして大事にしていきたいと僕は思っています。機能性を追求するばかりでは面白くなくて、何気なく気持ちが落ち着くところ、伝統を感じられるものを受け継いでいくべきやと思います。日本の大工としてね。また、古いものも大好きやから材料でも技でも大事にしてるけど、それをそっくりまねするだけでなく、これどうしたらもっとよくなるかなあいつも考えてます。だって、昔の人たちは技術や材料が足りなくてそこまでしかできなかったわけでしょう。今やったら材料も技術もなんぼでも発達してるからもっといいものができるはずです。昔の人たちができなかったことを代わりにやってあげる、そんな気持ちで取り組んでいます。宮大工の醍醐味は、何百年と



六角堂の建築



反り屋根の建築

続く次世代に残る仕事ができるところです。

### ■人を育てること

最近では20代の若い人や外国の方も修業に来ることが増えています。宮大工の技術は難しいから修業の段階でいやになって辞める人も多いですが、ちょっと辛抱してやりぬいて、お寺を守るためにも、若い子には宮大工になってほしいと思いますね。弟子は12、3人育ててきました。大切な子どもを預かった以上、早く一人前にしてやろうと力が入り過ぎ、指導がつい厳しくなってしまうこともあります。親方との思い出で一番覚えているのは、自分が仕事を間違えたときに、罰として3、4日食事を抜きにされたことですね。あのときは十代の食べ盛りやったしんどかったけど、今考えると、師匠のほうもつらかったやろなあ。早く一人前にするために、憎まれるのを承知でとった行為だと思います。今の時代、学校の先生も生徒も自分の身のほうがかわいくて、かつての師匠のように生徒や他人に必死になることがなくなったのではないのでしょうか。子どもを叱れない、子どもも辛抱できず、気に入らなければすぐにやめてしまう。あのとき私に憎まれてでも自分自身も苦しみながら職人の心髄というものを叩き込んでくれたからこそ、今の私があるのだと60歳を過ぎた今になって感謝しています。子どもたちもいつかはわかってくれるものです。

ご協力いただきました株式会社山中工務店さん、どうもありがとうございます。